



からこかぎ

第 3 号
平成 2 5 年
1 月 1 日

年頭のごあいさつ

会長 梅野 満雄

明けましておめでとうございます。会員の皆様方には、平成25年の新春を希望に満ちて迎えられたこととお慶び申し上げます。

さて、平成16年4月に「唐古・鍵遺跡の保存と活用を支援する会」が発足後、年々充実したボランティア組織になり、本年度で設立9年目を迎えることができました。

昨年も、唐古・鍵考古学ミュージアムの館内ガイド、学校支援活動として、町内の小学校での土器づくり・火熾し・勾玉づくりなどの弥生体験、田原本町文化祭でのスタンプづくりなど活動を行いました。

さらに、唐古・鍵遺跡の史跡公園では、田原本町の呼びかけでコスモス植栽を行い、秋には、楼閣をバックに綺麗な花を楽しみました。

このような活動の他、土器づくりや石器づくりなどのものづくり教室、鴨

都波遺跡、坪井・大福遺跡などに出かけての弥生勉強会など多くの活動を行いました。

会員数の減少は大変気になります。活動内容や活動実績については、益々充実した活動が行われていると自負しています。これも、ひとえに、会員の皆様方の「唐古・鍵遺跡」に対する熱い思いの賜であると感謝しています。引き続き、皆様方のご支援・ご協力をお願いするとともに、本年も皆様方にとって良い年でありますように祈念し、年頭のごあいさつと致します。



コスモスのひた向きな

力強さに感激

— 遺跡コスモス畑からの報告 —

大森 初美

昨年10月20日午前7時半、唐古・

鍵遺跡西側のコスモス畑に集合したところ、色々な撮影機材を手にした多くの老若男女にびっくり。聞けば、暗いうちから唐古・鍵遺跡に集合し、日の出を背に楼閣・コスモス畑を撮影中とのことでした。

コスモスは、事前に下見したところ、9月30日の台風17号の北風をもろに受けバツタリ、将棋倒しでした。私達は、その後片付けのつもりでした。何と！ナント！なんと！

コスモスは、倒れたそのまま、今度は太陽に向かって頭をもたげ、すくすくと腰を低くして延びてくれていました。何事もなかったかのように。

鮮やかに、赤紫、濃いピンク、うすいピンク、白など色とりどりの大きな花びらが朝露に濡れて元気いっぱい、今まさに満開の時期でした。

私達は、コスモスに元気をもらい、秋の虫達が奏でるバックコーラスの中、コスモス畑の清掃を、楽しくしました。最後に朝日と楼閣を背に記念撮影をして、来年も必ず！お手伝いを！と誓い合いコスモス畑のお手伝いを終了し

ました。

因みに、当日写真教室がおこなわれており、講師の先生に撮影していただいたのが、前掲の写真です。

色づく秋の総合学習

— 火熾し・野焼き・赤米炊飯体験 —

今西 和代 川端 優秀

木々が赤や黄色に色づいて落ち葉が校庭に敷き詰める季節に、児童が作って乾燥させていた土器を、5時間余りかけて野焼きを行いました。今回は「野焼き」について説明します。

まず、その前に児童の「土器づくり」の手順を簡単に説明します。

子供達は、材料の粘土でうどんなのような紐(太さ1〜1.5cm、長さ30cm)をつくり、それを積み上げて土器の輪積みを行います。そして割れや水漏れを防ぐために、丁寧に接合面を指で消します。この手順を繰り返して、弥生土器をつくりあげます。その後、児童の土器は、自然乾燥をして、秋の野焼きを待ちます。

つくり上げた子供達の弥生土器は、軟質の土器です。縄文土器や古墳時代の土師器と同じグループに属します。須恵器などの土器は、窯を使用して焼き上げたもので、焼成の温度は千度を

超える高温で焼き上げた硬質の土器と異なります。

唐古・鍵遺跡では、土器を焼いたとされる遺構は、青銅器鑄造関連遺構の焼きしめられた土坑と異なり、検出されていません。その結果、地面に燃料を置き土器を乗せる平地焼成が想定されています。つまり、掘った穴の中で焼いたのではなく、平らな地面で焼くのが普通であったことを物語っています。従って、私達の野焼きも小学校の校庭で平地焼成を採用しています。

私達は、野焼きに二つの工夫をしています。

一つは、温度を高め、それを持続する工夫です。一般に、粘土は約五百度を越える熱を受けると可塑性を失い、粘土に戻らなくなるといわれています。しかし、平地焼成の場合、地面が水分を多く含んでおり、なかなか焼成温度が上昇しません。温度が低いと、焼成の途中で、土器は破損します。特に、田原本町は地下の水位が高いため、工夫が必要でした。その工夫は、通常想定されている以上に、念入りに「カラ焼き」をすることでした。私達は、そのため、焼成時間の半分以上を地面の水分の乾燥に使い、更に焚き火の周りに土器を置き余熱をします。

余熱後、「おき」化した燃料の上に

土器を置き、更にその上に燃料を置き、土器をサンドイッチ状態の覆い焼きにします。その時点で初めて、八百度を超える焼成温度を持続させることが可能となります。

更に一つは、黒斑の防止策です。遺跡から出土した弥生土器は、通常黒い斑点がみられます。この斑点は、焼成中に灰の付着や火回りの悪かったことに起因するといわれています。私達は、土器の黒斑を見つけると、更に高温で短時間ですが焼成しています。

お昼休みに、子供たちは、走ってきて、自分のつくった土器の焼かれています。様子を見に来てくれます。子供達の顔も、赤い焔のせいでしょうか、赤く輝いています。

2時半頃には、ようやく弥生土器が焼き上がります。

焼き上がった土器を見て、児童たちから次のような感謝の言葉を伝えてくれました。

『一学期の土器づくりから今日の野焼きまでお世話になりました。』

・赤米入りごはんは炊飯器で炊くよりも手間はかかるけど、土器で炊くといっそうおいしく感じました。火熾しはマッチやライターを使うよりも時間がかかるし腕が疲れて大

変でしたが、火がついた時には達成感がありました。

・支援する会のボランティアさんたちが一日かけて焼いて下さったので、いい土器が出来上がってうれしかったです。』

子供達のつくった弥生土器は、どれ一つとして、同じものではありません。子供達の持つている大事な個性が反映され色々な形をしています。子供達は、大事そうに、自分のつくった土器を手



にしています。「あつた。」という大きな声に、私達の疲れも吹っ飛びます。

でも、残念ながら、割れた土器もあります。私達は、そのため、燃えた灰の中から、土器の小破片を探し、接合に努めます。そばには、一緒に子供達も土器の接合をしています。そこには、土器の見つかからない子供だけでなく、その子の友達も一緒です。

子供達の弥生土器づくりは、単に土器をつくるのでなく、それ以上のものをつくっていると実感できる時間です。唐古・鍵遺跡の保存と活用を支援する会は、子供達の土器づくりの時間を大切に思っています。そして私達は、土器づくりのスキルアップを図り、子供達の笑顔を大事にしたいと思っています。

唐古・鍵遺跡の清掃について

大森 初美

今年度、二回目となる唐古・鍵遺跡の清掃を、12月11日に行いました。10数名の参加があり、例年の通り遺跡の回りと唐古池の遊歩道を中心に行いました。当日は、天気にも恵まれ、例年以上のごみの量があり、特に空き缶とタバコの吸い殻が目立ちました。

唐古・鍵遺跡について普段考えている思いや疑問点を話し合いながら進めると、あっという間に予定の時間を

オーバーしてしまい、楽しいひと時を過ごしました。

また、3月には、北小学校の卒業間近の六年生が遺跡の清掃を予定していることを聞き、うれしくなりました。



古代ものづくり教室から

— 機織り体験 —

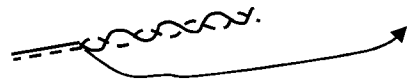
山本 淳史

木々の色付きもまし秋も深まる、その時期は農家の人たちにとって稲刈りが終わりほっと一息つく季節です。

糸のつなぎ方

二千年前の唐古・鍵の集落の人たちも同じ感慨をもってこの季節を迎えたのではないでしょう。私の想像ですが、収穫祭も終わり一年で一番充実感に満ちた、次の年への備えを開始する季節だったと思います。男は農機具の

1・元と先を合わせて燃る



2・先側の糸を折り返して燃る



手入れや環濠の補修に精を出し、また女性たちは初夏に採取し保管してきた青苧(おうそ)で糸紡ぎを始めたと思います。また夏に作った土器の野焼きもこの時期がいいですね。

私達「ものづくりメンバー」も、初夏には藍染め、夏には土器づくり、秋には稲の穂刈りと弥生の人達と同じ季節の流れに沿って体験してきました。その流れの中から、今回は「機織り体験」の一部を報告します。

まず、糸の素材ですが、一般的に「麻」と呼称されている物には二種類あります。苧麻(からむし)と大麻です。これらは全くの別種であり姿・形も違うのです。苧麻は聞きなれない名前ですが、注意して観察して見てください。私たちの近くでしつこい雑草(宿根草)

として、いたる所で繁茂しています。

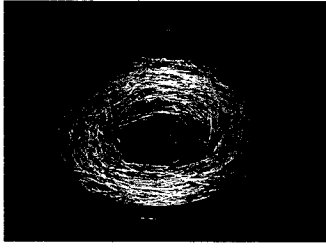
これは魏志倭人伝に記されているように、古代から栽培されていた名残と思われれます。一方の大麻は、麻薬の原料となるので近年は栽培が禁じられ、国内では栃木県の一部でのみ栽培されています(現在の奈良晒し青苧はここから納入されている)が、通常は見かけることはありません。しかし、そのいずれも戦国時代以降は簡単に染色できる庶民の布「木綿」の普及で徐々に衰退します。そのなかで、越後上布や奈良晒しが高級品として継続的に生産されています。

現在、越後上布は苧麻の使用を続け、奈良晒しは明治期に大麻に取って代わられています(月ヶ瀬村発行「奈良さらし」。実際に触った感触は、苧麻の方がしなやかで手触りがよく、朝鮮半島では高級チマチョゴリの原料として今でも苧麻の栽培が盛んとのこと。余談になりますが、奈良晒しの糸の集積地として江戸中期の「奈良曝布古今俚談集」に今井口・桜井口・田原本口と私たちの地元の名が上がっています。苧麻との関わりの深さに驚かされます。ただし、唐古・鍵遺跡出土布は大麻でできています。これを踏まえ今回は大麻青苧(おうそ)を使用し、奈良晒し保存会での体験を基に機織りを行います。

した。

では、いよいよ糸をつくる苧績み(おつみ)ですが、前処理として青苧を清水に5時間ほど浸し、米のとぎ汁白水(しろみず)に2時間漬けた後絞って、陰干しをすると韌やかになります。これをコクバシ(二本の竹管を繋いだもの、会員の藤原さんお手製)で扱き、繊維を小分けして適当な細さの糸を取り出します。取り出した糸(一本の長さ60cm程度)の紡ぎ方は、親指と人差し指の間に3cmほどに合わせた糸を挟み、指の間で二本の糸を転がして燃りをかけ、つないでゆく、指先の感覚で繋ぎの成否が決まります。この糸紡ぎは元(茎の根元側)と先(茎の先端側)を順番に繋いでゆることが原則です、これがデタラメになると、機織りの綜統(そうこう)時に毛羽立ちとか糸切れが生じて作業がはかどりません。糸つなぎは根気と熟練がいる作業です。今回挑戦された会員さんも十回で一回の成功率でした、機織りの最大の難関と言われています。

次に、紡いだ糸は元から苧桶(おごけ)に輪にして貯めます。10mほど貯まると苧桶の中の糸を新聞紙の上にひっくり返し、糸の上を米糠で覆います。これは、糠の油で糸の滑りをよくし、その重みで絡みを防止する効果が



糸績み (苧桶)

あるためです。糸のつなぎ目が絡まないように元の方から手繰って紡錘車で撚りを掛けます(この時糸を湿らすと馴染みが良くなる)ここでも手先の感覚が頼りです。紡錘車の回転方向を一定にし、回転速度や撚りの強度は勘頼みです(糸車は回転数で調整でき個人差が出ない)。今回、私の体験では紡錘車1個で100mほどの糸が巻き取れました。これから単純計算すると一着分の布を織るのには、50個ほどは必要となり紡錘車の出土量の多さがこれで理解できます(ミュージアム第2室の引き出しに多数の紡錘車が展示されています)。

ここまで出来れば、機織りの五割がたが終わったようなものです。今回は紡錘車の糸撚りまでにします。この続きは次回以降としますがご希望があれば何時でも、ものつくり教室で体験できますので、ご連絡ください。

第4回弥生勉強会に参加して

植田 洋高

昨年、10月14日(日)秋のさわやかな晴天のもと耳成駅を10時に出発しました。遠方より新幹線で駆けつけ加された方、自転車で駆けつけられた方、地元で途中より合流された方など24人の参加がありました。

坪井・大福遺跡説明地点は、中和幹線の開通により次々に商業施設が建設され田園風景が近年最も変化した地域です。遺跡北側を寺川が流れ、橋を超えた北側に生産域、南方に弥生中期を中心とした前期・後期及び古墳前期にいたる複合遺跡の地域確認ができました。

藤田先生より、唐古・鍵遺跡の環濠帯形成地は、初瀬川流域からは少し離れた距離にあるのに対して、坪井・大福遺跡の環濠帯形成地は、寺川流域により近い距離で形成されている等の説明がありました。

次に向かった大福遺跡は、桜井市大福に所在する弥生時代後期を中心とする集落遺跡で、大福小学校の建替えに伴う第三次調査において出土した大福銅鐸発掘地点も確認できました。桜井市と橿原市にまたがる坪井・大福遺跡と大福遺跡の関連については、行政区

の違いが妨げとして存在しているようでした。

森本六重頭彰碑を經由し、芝遺跡南地域(桜井市芝運動公園)で昼食をとった後、午後から巻向遺跡に近接する芝遺跡北地域(北側に纏向川が西流)で、藤田先生より、近年調査で絵画土器や搬入土器及び銅鐸形土製品などが出土したなどの説明がありました。

最後に桜井市埋蔵文化財センターに到着しました。職員の方より本日の勉強会で訪れた桜井市内遺跡の大福遺跡、芝遺跡などの展示物等の解説、さらに纏向遺跡の解説もたいへん興味深く受けることができました。

藤田先生はじめ埋蔵文化財センター職員の方、丁寧な説明ありがとうございました。耳寄り情報

今回の弥生勉強会で訪れた埋蔵文化財センター東方に三輪山があり、山麓には日本最古の大神神社が鎮座しています。別名お酒の神様とも言われています。

大和の国は古来より政治経済の中心であり、日本酒も奈良の地から発祥し栄えました。特に日本酒と縁深いのが三輪にある大神神社であり、酒と杜氏の神を祀っています。大神神社の御神体である三輪山は、古来三諸山(み

むろやま)と呼ばれ、「うまみ酒みむろの山」と称されるは「みむろ…実醪」すなわち「酒のもと」の意味で、酒の神様としての信仰からの呼び名であるともいわれます。

大神神社近くには、創業万治三年より三百五十年「みむろ」の名を酒の銘柄として御神体三輪山の伏流水で醸している今西酒造があります。参道にも今西酒造の販売店がありますのでご参拝のときに興味ある方は、お立ち寄りされてはいかがでしょうか。

桜井駅北出口から北方約300メートル大和信用金庫左折して100メートルの所に清酒三諸杉(今西酒造)やその他奈良の地酒など味わえる店、居酒屋(お昼から営業されている居酒屋)があります。同店舗内には、よしおか酒店としてお酒の販売もされています。奈良の地酒も取り揃えておられます。



第5回弥生勉強会に参加して

佐藤 孝一

川崎市より、毎回楽しく参加させていただいています。東京の友たちには田原本町や唐古・鍵遺跡の宣伝をしています。参加中に私の頭の中では、唐古・鍵遺跡やその周辺で見つかった紡錘車の余りの多さに、きつと桑の木の根や麻の畠跡が見つかるだろうと想像しながら歩いています。いつか大量の布や糸の発見を期待しています。

第5回弥生勉強会に参加して

川端 優秀

2012年12月2日に実施された弥生勉強会は、丁度丸一年を経過して、第5回として行われた。今回は、過去4回の弥生拠点集落を勉強して1年が経ち唐古・鍵遺跡の周辺遺跡を巡るという企画のもとに実施された。磯城郡三宅町一帯は、条里制の名残をとどめる水田が一面に広がり、文字通り屯倉や条里のあり方を考える上で、重要な土地である。そして、京奈和自動車道の建設に先立つ発掘調査によって、田原本町から三宅町、川西町にかけて数多くの遺跡が、近年発掘調査された。それらは、田原本町の保津・宮古遺

跡、三宅町の伴堂東遺跡、三河遺跡、天理市、川西町の庵治遺跡、下永東城遺跡、下永東方遺跡などである。これらのうち保津・宮古遺跡以外は、弥生時代の様相の一端が初めて明らかになったものであり、方形周溝墓という弥生時代の墓が複数発見されている遺跡も多い。また、旧河川の氾濫による堆積でできた高まりの上を中心に形成されたものが多い。

私は、近くにおりながら初めて歩いてみて、遺跡の分布の濃密さに驚いた。これらの遺跡の多くが「拠点集落」である唐古・鍵遺跡との距離が2キロ以内であることもあって、唐古・鍵遺跡の集落から分村によって成立した「衛星集落」で、本村の影響下にあった集落であるか、或いは唐古・鍵遺跡の集落で暮らしていた人々の墓地が営まれた場所であったかもしれない。

ただ、私には、気になることがある。これらの弥生遺跡は、小規模ながらも弥生前期の集落である点である。唐古・鍵遺跡も、初めから42ヘクタールにおよぶ集落が成立したのでなく、微高地に築かれた集落は3ヶ所に分かれていたようであり、それほど大きな集落ではなかったはずである。弥生時代初め頃は、これらの一連の遺跡は並立して形成されたと考えるべきであり、

1・5キロほど遠くに離れた地域に唐古・鍵遺跡の分村が作られたと考えるには無理があるように思える。そんなことを想いながら、12月にしてはかなり暖かい一日をゆっくり巡ったことは良かった。唐古・鍵遺跡ではガイド研修会も合同でおこなわれ、充実した勉強会であった。

第6回弥生勉強会のご案内

——一町遺跡と周辺遺跡——

井上 知章

1 一町遺跡と高地性集落
今年3月下旬に予定しています勉強会は、奈良盆地の南西部に位置する一町遺跡及びその周辺遺跡を探訪する予定です。

一町遺跡は、大正時代に調査が開始された古くから知られた弥生遺跡です。東の丘陵上には新沢千塚古墳群があり、西に曾我川が流れ、その狭間の南北700m・東西250mが遺跡範囲といわれています。集落の中心域は遺跡の南部と想定されており、縄文晩期及び弥生前期から後期の土器が多量に出土しています。最近では、2006年には南東部、翌年には更に南側の本格的調査がなさ

れ、集落の推移が判明してきています。特に、2009年に初めて市道改良工事に伴い遺跡北部での調査がなされ、中期後半と後期後半の遺構・遺物が限定的に出土したことより、その時期に集落域が拡大したこと更には後期前期の土器が欠缺していることより高地性集落の上ノ山遺跡との密接な関連が確認されています。それは、第1回弥生勉強会で確認した長寺遺跡の弥生中期から後期の断絶期に、付近の丘陵に環濠を築いた東大寺山遺跡と同一の集落関係を示しています。

従来は、高地性集落に関する論議は、その定義づけや分類そしてその役割の、確認(機能論)が中心でした。最近では、具体的な考古資料(二つの集落の遺構・遺物の較量)からその移住事実を確認し、その集落構造(生業・地形・仕組み)を踏まえて、さらに地域社会の変容等に論議が進展しているようにみられます。特に、近畿の高地性集落は中期中葉から後葉に出現し、その終末は後期後半とされ、その収束後に纏向遺跡等の拠点集落が出現したとされています。従って、高地性集落の論議は、弥生期から古墳前期に至る社会の変容過程の論議に影響を及ぼすものと注目されます。

上ノ山遺跡は、一町遺跡の東側の丘

陵にあり、炭化物層の堆積のある方形土坑や後期初頭のV字断面溝や石包丁・絵画土器・記号文土器が出土しています。また、その北方には、後期後半の住居跡やそれを圍繞する溝が検出された忌部山遺跡があります。

このように、一町遺跡周辺は、盆地では少ない高地性集落が隣接している地域です。今回は、一町遺跡の集落の推移だけでなく、以上の視点から高地性集落の動向も確認したいと考えています。

2 観音寺本馬から川西根成柿遺跡
一方、一町遺跡の曽我川対岸地域では、京奈和自動車道の事前調査により新たな遺跡が発見されました。それらは、第3回弥生勉強会で確認した前期水田址が検出された中西遺跡、今出遺跡、京奈和自動車道関連遺跡等に近接する縄文期から弥生期に継続する遺跡です。

まず、川西根成柿遺跡からは前期の環濠集落の遺構が、またその生産域と比定される萩之本遺跡からは前期水田址や灌漑施設等が検出されています。また、萩之本遺跡に隣接する一町西遺跡からは前期の大溝2本が検出されその機能が着目される一方、観音寺本馬遺跡からは縄文晩期中葉の住居址・土器棺墓・環状杭列・木組遺構・流路等

が検出されています。

このように、これらの遺跡からは、縄文晩期後半の突帯文土器片も含め、縄文期から弥生期の移行過程の変容を推測させる遺構・遺物が発見されており、この時期の集落の変化を確認できる地域ということが出来ます。

従前より、水田稲作の主体をめぐる論議があります。一つは、入植説・住み分け説というべきもので瀬戸内から大阪平野を経由して移住した農耕民が在来の縄文人と並存して稲作をおこなったとする説と、一つは在来の採取生活を中心とした生業を営んでいた人々が水田稲作技術を受け入れ徐々に農耕民に変化したとする自生説があります。唐古・鍵遺跡への農耕伝来と関連し、興味のない課題ですが、その視点から、これらの遺跡を、確認したいと考えております。

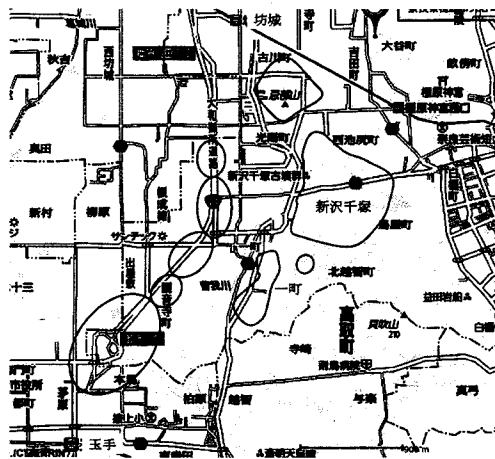
3 追記

弥生期の考古学的関心は、大まかに二点に集約されているといえるかも知れません。一つは、縄文期から弥生期の移行プロセス、換言すると採取経済から農耕社会への移行プロセスの解明であり、一つは弥生期から古墳期に及ぶ初期国家形成に関するプロセスの解明です。

第6回弥生勉強会のテーマは、従前

の勉強会の探訪遺跡に比べ、より直接的に二つの課題に接近したものといたします。

多数の会員のご参加と活発な議論を楽しみに、3月下旬を待ちたいと考えています。



会員募集

趣旨にご賛同いただく方の会員募集を行っております。お知合いもお誘いの上活動にご参加ください。
年会費 2,000円

編集後記

「唐古・鍵遺跡の保存と活用を支援する会」の会報「からこかぎ」第3号をお送りいたします。今回は、新年号として、会長の年頭のご挨拶を掲載い

たしました。今号は、発行日の関係で、弥生勉強会の第4回と第5回の感想を同時に掲載しています。神奈川在住の佐藤さんからも、温かい励ましの文章をいただきました。ありがとうございます。

師走には、例年のとおり、注連縄づくりも15名のご参加をいただき、新たな気持ちで新年を迎えることができました。本年もどうぞよろしく願います。

編集委員

井上知章 植田洋高 大森初美
小林恒雄 谷口敬子 福島道昭

唐古・鍵遺跡の保存と活用を支援する会

〒636-0247

奈良県磯城郡田原本町阪手 233-1

田原本青垣生涯学習センター

唐古・鍵考古学ミュージアム内

TEL:090-9257-3688

Email:karakokagijimukyoku@swan.ocn.ne.jp